

佐久の先人たち③9

地域づくりと自由民権に生きた医師

こまつ はじめ
小松 大

(1848~1895年)



幕末から明治という激動の時代に、医師として地域に病院をつくり、住民の生活向上をめざして学校を建設し銀行を設立する。自由民権運動にも力を尽した。

を得て、御影村(現小諸市)に、自分が学んだ西洋医学を伝えるため、医学館を設立した。

一八七二(明治5)年、入会地であった一の原・長者原など、合わせて六二万坪(二〇〇畝余)の払い下げを受けて開墾を計画し、村の農業発展に力を尽くした。

また、龍岡藩主だった大給恒が一八七七年東京に設立した博愛社(後の日本赤十字社)で、西洋医学を学んだ。信州に戻り、野沢(現佐久市)に病院を開設し、その後、松本で病院長に赴任し、各地で活動を広げたが、病のため布施村に帰村し、再び故郷で医療活動を始めた。一八八二年には北佐久郡医になっっている。

●学校と銀行の設立

一八八〇(明治13)年、抜井に設立されていた尚志学校が中居に移転することになり、小松は布施村中居に共立学校を設立し、筆頭幹事になった。小松は地域の教育にも大きな関心を持っていたことを示している。

一八八一年には、資本金十二万円の布施銀行が設立され、小松はこゝでも中心的な役割を果たした(後に頭取になる)。布施銀行は佐久地方で最初に承認された普通銀行(他に小諸銀行)の一つであった。株主の範囲は、二八町村にまたがる二六二人で、本店は布施村に置いたが、支店を小諸に、出張店を

望月に、代理店を春日と下之城に設置した。しかし、米価の低迷や生糸の輸出困難などで銀行の経営は厳しく、やがて経営の中心は小諸支店に移っていった。小諸は「追分宿から分かれる北国街道最初の宿場町で、碓氷峠をひかえ、関東への要衝を占めたところから、関東物資をあつかう卸売商が発展し、商圏も長野から松本・諏訪方面まで広がっていた」。布施銀行は小諸の豪商と南佐久の豪農たちに支えられていた銀行であった。

●自由民権運動に参加

小松は医師としてだけでなく、地域の経済活動も振興しようと活動を広げ、やがて政治活動にも参加していった。西南戦争の後一八八一(明治14)年、板垣退助が自由党を結成し、国民の権利や自由獲得をめざす自由民権運動が各地に広がると、小松は一八八四年、自由党に入党した。しかし、秩父事件などもあり、政府の弾圧は厳しさを増し、自由党は一時解党せざるを得ない状態であった。

当時朝鮮は、日本と清国の対立を背景に動乱期にあった。朝鮮の政権内の対立に対して、日清両国が軍を派遣した。自由民権派は当初政府の朝鮮内政への干渉を批判したが、政府は清国の横暴を強調し、やがて民権派も、清国討つべしという主張に変わっていった。

●人が健康に生きる権利を願って

小松は、幕末から明治という激動の時代に、医師として医療衛生活動に従事するかわら、人間が健康に生きる権利を考え、さまざまな政治的状況を意識するようになった。開墾事業も銀行の設立も学校の設置も、村民たちの生活向上をはかるうとするものであった。身近な生活に根付いたところから深まった政治意識が自由民権運動への参加となり、当時反政府であった自由党に入党する決意となったと思われる。

自由民権運動の力も働いて、明治政府は一八八一(明治14)年、一〇年後に国会を開設する詔勅を出した。一八八八年東信有志懇談会は三八名が参加して総会を開き、国会開設を目前に選挙も意識し、東信友誼会という名称で、政社として届け出ることを決めたが、そこには小松の長男小松可買も参加していた。長男も親の意志を継いでいたのであろう。

(吉川 徹)

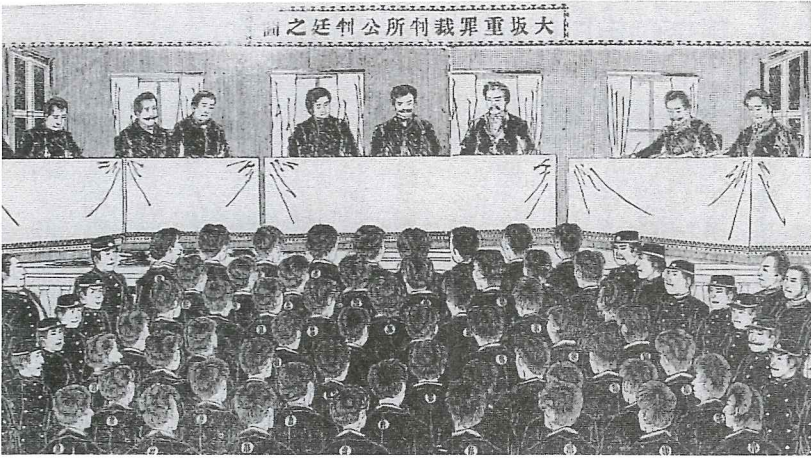
○参考文献

- 望月町誌編纂委員会『望月町誌』第5巻 近現代
- 望月町誌刊行会『望月町誌』一九九九年
- 上原邦一『佐久自由民権運動史』三三書房 一九七三
- 長野県『長野県史』通史編第七巻近代一 長野県史刊行会 一九八八

肖像写真 小松つの子氏蔵

●大阪事件にかかわって収監される

朝鮮と日本の自由民権の闘いを結合するため、朝鮮に渡って、清国と結ぶ朝鮮の事大党を倒し、独立党政権を樹立しよう、という計画が進められた。佐久の自由民権派の中心にいた小諸の石塚重平は、この渡朝鮮計画の資金調達を担当していた。しかし、この頃は松方デフレ財政下の不況で有力な後援者も現れず、資金集めは困難を極めた。石塚は多方面に資金の調達を依頼し、かつてから知り合いであった



大阪事件公判廷の様子(元望月宿本陣 大森久芳氏提供)

布施銀行頭取の小松にも資金を頼んだ。一八八五(明治18)年、武器や爆発物も調達して朝鮮に渡るうとした時、警察は関係者を一斉検挙した。小松も資金調達を理由に中之島監獄に収監された(大阪事件)。大阪臨時重罪裁判所での公判では、被告六一名で、小松に対する被告一人尋問では「小松が『朝鮮事件』の計画を聞いてこれに賛同し、資金を出した」というものであったが、四ヶ月後に結審し、小松は証拠不十分で二〇名の被告とともに無罪となった。しかし、この事件も一つの原因となり、翌年布施銀行は解散した。

●北佐久医師会の初代会長になる

この裁判のあと、小松は郷里へ帰り、再び医師業に携わるようになった。一八九一(明治24)年、望月に済生病院を設立し、初代院長になった。開院式には、公立長野病院長、各村の村長、地元の開業医など数十人が集まり、諸氏の演説が行われて、大変盛会であった。その年、北佐久郡医師会(後の小諸北佐久医師会)が設立され、小松はその初代会長に推挙された。

一八九五年、日清戦争後の処理のための征台軍に軍医として従軍、台湾に渡ったが、翌年現地で病死した。死因はマラリアといわれ、享年四十七歳であった。